

令和6年度地域貢献プロジェクト事業報告書

キャンパス名 函 館 校
代表者氏名 中村吉秀

プロジェクト名	「教員の授業改善をすすめる“共有・協働・共感し合う”環境づくり」 ～小学校教員と教育大生の協議・実践を通して～
プロジェクトの概要	<p>「初等図画工作科教育法」の講義を担当している。その講義をより充実した内容とするために、また小学校図画工作科の授業において「個別最適な学びや協働的な学び」を具現化させ、学びの場を充実・確保するために、この実践を進めた。</p> <p>まず函館市立柏野小学校の教員1名と連携し、図画工作科の「授業づくり研修会」をスタートさせ、公立学校での授業改善のあり方を見出していた。次に、附属函館小学校の教員2名と本大学教員3名と「ふぞくでずこう」という「授業づくり研修会」をスタートさせた。取り組みとしては、7月24日の研究大会や「ふぞくでずこう」の研修会を継続させていった。その2つの「授業づくり研修会」で得た指導のポイントを、受講する教育大生たちに、還元する場を作っていく。このように、大学教員、公立学校教員、附属小学校教員、教育大生との連携つながりを意識し、皆が「自分事」に思えるような「授業づくり研修会」（環境づくり）を構築し、共有・協働・共感できるポイントを構想した。</p> <p>地域の学校（附属函館小学校・函館市立柏野小学校）と教育大生による実践・研究についてまとめたものを研修会や学会等の場で発表し、これからの「楽しい表現活動づくり」の広がり・継続化を図っていき、より効果的な「授業づくり研修会」（環境づくり）を構築していきたいと考えた。</p>
地域・学校・子ども等に還元した成果	<p>① 「授業づくり交流会」【柏野小学校教員との連携を中心に】 函館市立柏野小学校の教員1名との研修の場を企画し表現活動（図画工作科）のあり方について計画的に協議を重ね、授業公開も含め、検証の場面を設定していった。</p> <p>【5月16日】18時から 研究の概要を共有・共感する。 【7月18日】17時30分から 授業づくりについて協議を行う。 【7月5日】【7月12日】【7月17日】：授業公開日</p> <p>6年生を対象に図画工作科の授業を実施する。3回の授業公開を実施し、その授業ごとに意見交換し改善を試みた。単元名は「すてきな明かり」で、工作の領域になる。和紙を通しての光の美しさを各々に認識させ、工夫により美しさが増すことから、工作の楽しさを感じさせていた。さらに授業後に子どもたちの振り返りを行い、それぞれの制作の方向性を把握し意欲の喚起を図っていた。また、ビデオで記録し、自身の授業を振り返り省察を重ねた。</p> <p>子どもたちは、非常に意欲的であったが、和紙を通しての光の美しさをどのように求めていくのか、とても難しい部分もあった。そして、つくる過程での評価を大切にすることは重々理解できるが、それぞれで作品の完成を目指すことから、次の制作や学びの継続につながることを考慮に入れ、「満足できる作品にさせること」は大切にしなければならな</p>

いと感じた。

【7月26日 授業づくりについての協議】10時より

柏野小学校を会場に、今回の図画工作科の授業づくりについて協議の場を設定することができた。参加者は、教頭先生、公開授業者と学年を組んでいる先生、授業を公開した先生、中村の4名で、求められている授業（個別最適な学びと協働的な学びを実現する授業）を、現場としての考え方を加味しながら、1時間ほど協議を深めることができた。

【1月5日 函館学校教育学会でこの取り組みの概要を発表する】

② 「授業づくり研修会」【附属函館小学校2名の教員との連携】

附属函館小学校の教員2名と本大学教員3名と「ふぞくでずこう」という「授業づくり研修会」を4月からスタートさせた。取り組みとしては、①7月24日の附属函館小学校研究大会の図画工作部会をよりよいものにするために ②「ふぞくでずこう」の研修会（今年は、会場を北斗市立上磯小学校に設定したことから「かみいそでずこう」と命名を変更している）を積み重ね、図画工作科の授業改善のあり方を考察し、学生や教員の資質能力の向上を図る環境について考えを広げた。

【4月12日】17時より

大学の中村研究室で、まず7月24日の附属函館小学校の研究大会にむけて、協議を始める。

【6月24日】17時より

大学の中村研究室で、研究大会公開授業の指導案について検討する。

【6月27日】15時30分より

附属函館小学校で研究大会の事前協議会に参加する。

【7月22日】11時50分より

7月24日（研究大会）に向けて、附属函館小学校6年生の図画工作科の授業を参観する。

【7月24日】令和6年度北海道教育大学附属函館小学校研究大会

共同研究者として授業参観、研究協議、実技研修に参加する。授業改善を中心とした協議を展開することで、教員自身の資質能力を高める環境のあり方について、考えを広げることができた。

【10月30日】16時より

研究大会についての反省と次年度の方向性について協議する。その後、「かみいそでずこう」についても協議を始める。

【2月7日】16時より

「かみいそでずこう」研修会について北斗市立上磯小学校で授業についての協議を行う。

【2月20日】13時より

「かみいそでずこう」研修会を実施する。参加者は、教育大学函館校の教員3名、学生4名、上磯小学校の教員4名、附属函館小学校教員2名、渡島美術教育研究会3名、函館市美術教育研究会3名、他校の教員2名の計21名の参加で実施された。

まず、図画工作科の授業（2年生）を公開し、その後授業についての協議を行い、次に中村が講師として講演を実施した。協議を重ねること

	<p>でそれぞれの意見が出やすくなり、まさに共有・協働・共感し合う環境になっていたと実感できた。これからも、このつながりと態勢を生かしながら、研修会を継続し学生や地元教員に資する学びを目指していきたいと考えた。</p> <p>以上2つの「授業づくり研修会」の実施により、地域の教員・子どもに多様な視点で還元することができたと考えている。特に、授業づくりに多くのヒントを示すことができた。</p>
<p>学生資質向上・教職資質向上のために果たした成果</p>	<p>【8月26日】【11月19日】 授業公開をした教員による大学での授業（初等図画工作科教育法）での取り組み方についての確認 17時30分より 【12月5日 講師として学生に図画工作科の授業のあり方を提示する】 12月5日の初等図画工作科教育法で、柏野小学校若林教諭が小学校の図画工作科の授業のあり方について、授業をもとにまとめたプレゼン資料を示す。そして、学生たちが実際に子どもたちと同じ材料で「ランプシェード」を作成し、実際の授業の課題についても認識させる。 【12月19日 講師として学生に図画工作科の授業のあり方を提示する】 大学と連携し図画工作科の授業づくりを進めてきた附属函館小学校の船橋教諭に、「初等図画工作科教育法」で学生への指導を実施した。柏野小学校の先生は初任2年目での図画工作科の指導のあり方について学生に語っていただいたが、附属函館小学校の教員は経験も豊富で、初任2年目の教員と多様な視点で比較ができ、学生たちのこれからのあり方・取り組み方として、学びの多い2こまの授業になっていたと捉えている。</p> <p>【2月20日】13時より 「かみいそでずこう」研修会を実施する。参加者は、教育大学函館校の教員3名、学生4名、上磯小学校の教員4名、附属函館小学校教員2名、渡島美術教育研究会3名、函館市美術教育研究会3名、他校の教員2名の計21名の参加で実施された。 まず、図画工作科の授業（2年生）を公開し、その後授業についての協議を行い、次に中村が講師として講演を実施した。協議を重ねることでそれぞれの意見が出やすくなり、まさに共有・協働・共感し合う環境になっていたと実感できた。これからも、このつながりと態勢を生かしながら、研修会を継続し学生や地元教員に資する学びを目指していきたいと考えた。</p> <p>【弘前大学教育学部附属小学校の視察】 令和6年6月19日（水）弘前大学教育学部附属小学校の視察で、八嶋孝幸先生の図画工作科の授業を参観してきた。題材名は、「〇〇に命を吹きこんで」工作に表すであった。内容は、コマどりアニメーションの仕組みを使って、表し方を工夫する中で、普通なら動かないものが動く面白さを発見したり動きのキーワードを（ウゴキーワード）をもとに「動き」を追求したりして、アニメーションをつくるものであった。</p>

	<p>子どもたちは、各自のタブレットを活用し撮影を行い、友人のよさを取り入れながら表し方を自分なりに工夫できるように進めていた。非常に意欲的であり活動的であった。</p> <p>この授業を参照し、函館市立柏野小学校の図画工作科の授業につなげていった。特に、子どもたちが自分たちの考えを友達と協議する場面は、大きな学びになっていたので、柏野小学校の授業でもそのようなことを大切にしよう試みた。</p>
<p>キャンパス及び大学への貢献</p>	<p>子どもの表現活動を通して、どのような資質・能力を育てていくのか、しっかり把握していくことが大切だと考えている。さらに、子どもの情操を醸成する具体的な実践につなげるために、「感性や創造性」発揮についてもっと思いを巡らしていくことが必要になっていくと捉えている。</p> <p>このような研究会・研修会・視察等を通して、教育大生の子どもに対する理解が深まり、さらに地域教員たちの資質・能力の向上につながることも期待できる。また、表現活動づくりに必要とされるポイントを見出すことも可能となった。</p> <p>表現活動の広がりや深まりは、今の子どもたちに欠けている「優しさ、寛容性」を広げていくことにつながっていると感じている。この連携による実践の積み重ねは、先生方や教育大生の意識を変容させ、求められる資質・能力の向上を図ることになっていた。そして、子どもの表現活動づくりを通して情操を醸成することは、自己肯定感を高め、それぞれの学びを深める大きな契機となり、人としての基盤を育成していくと考えられる。そして、小学校教員を目指す教育大生にとって、この研究会・研修会の場は大きな刺激となり、自分事として必要とされる職能の向上が期待でき、さらに組織的な研修のあり方を認識することになっていた。また、現場の教員との研究協議の場で、「理論と実践の往還」が認識でき、共感が生まれ、具体的な課題を認識することにつながったと考えている。</p> <p>「初等図画工作科教育法」の中で、附属函館小学校の教員と柏野小学校の教員が、教育大生を子ども役として指導することで、子どもに必要なとされる表現活動に対する意識を変容させることができできていた。そして、地域（渡島・函館）の小学校教員に、函館校は地域の課題に応えていることをアピールすることができた。さらに、このような連携と実践の交流は、多様な課題に対応するシステムの構築ができる可能性を示唆でき、道南を網羅する北海道教育大学函館校としての存在意義を示すことになっていたと捉えている。</p> <p>参加した地域の小学校教員及び教育大生の意識調査アンケートやビデオ・写真記録・プレゼン資料等で振り返り、企画者等で省察及び検証を重ねる。それをもとに効果的な表現活動の題材や指導のあり方、材料の扱いをまとめる。また、このような附属函館小学校・函館市立柏野小学校との重層的な連携は、今後多様な学びの場（環境）をつくっていき、展開していくうえで、大きな意味をもつ。さらに、教育大生の学びの可能性を広げ、大学による貢献は道南地域を大きく勇気づけると思われ</p>

	<p>る。そして、私たちがより意欲的に自身の資質能力を共感・協働的に構築することができ、言い過ぎかもしれないが、それぞれが「楽しさと充実感」を味わっていたように感じられた。</p> <p>次年度以降の継続化は、多種多様な還元が期待できる。</p>
--	---

※プロジェクトに関する資料がある場合は、併せて提出してください。

